

鬼怒川河川敷（旧氏家町側）及び

その周辺のミヤコグサの現状

副会長 田代 英夫

管理地とその他の2つに分けて、ミヤコグサの現状について述べてみます。

1 管理地のミヤコグサ

約300株のミヤコグサが約1,100㎡（約300坪）の広さの管理地にしっかりと根付いています。そして、現在（平成17年11月11日）に至っても、わずかではあります、まだ花を残している株もあります。



現在までに移植は2回行いました。1回目（平成16年5月1日）に44株を氏家大橋より少し下流の河原から、2回目は210株を栃木銀行氏家支店の現金自動支払機のある敷地から移植しました。移植した株以外に、自然に生えたものも含めて約300株が強さ、大きさを加味しながら順調に育っています。

ミヤコグサは砂礫質の土壤が合っているようです。また、日光が欠かせません。ミヤコグサは地に這うように成長する丈の低い草なので、近くに背の高い草が生い茂ってくると生育の妨げになります。従って、日常的な除草が重要になってきます。

現在、この種の除草は、不十分ながらも会長や数名の会員が行っています。会員だけで手に負えなくなった時には、行政当局に頼んでシルバー人材センターの手を借りています。

近い将来、多くの会員がこの管理地に集い、ともに除草に汗を流した後、昼食でもとりながら楽しい語らいができるような機会を作れればと願っています。



ミヤコグサの群生

2 管理地以外のミヤコグサ

注意してみると、旧氏家町側の鬼怒川河川敷や土手には、意外とミヤコグサが自生していることに気づきます。その分布の状況は、北は東北新幹線の少し下流から、南は阿久津大橋の少し下流までと広範囲にわたっています。

その点在の仕方は、ほんの少ししかない所もあれば、かなり密生しているところもありさまざまです。わずかな数にしる、この近辺でまだ希少種のシルビアシジミ（平成16年12月15日に旧氏家町の天然記念物に指定）を見ることができるのは、この自生のミヤコグサがあったればこそです。

こういった観点からも、管理地以外のミヤコグサについても、見守っていかなくてはと考えています。

シナダレスズメガヤが取り持つ縁

私が初めて「シナダレスズメガヤ」という草の名前を知ったのは、氏家大橋に近い河原で、東京大学保全生態学研究室が中心となって行っていた、この草の除去作業（平成15年10月30日）に参加した時でした。目にしてみれば河原のあちこちで、今まで日常的に見ていた草でした。この除去作業は鬼怒川（旧氏家町側）の砂礫河原に生息する昆虫類（例：シルビアシジミなど）を保全する目的で行われました。

一例を挙げれば、シナダレスズメガヤをそのまま放置しておくと、シルビアシジミが食草として背丈の低いミヤコグサは減ってしまいます。従って、シルビアシジミも絶滅しかねないわけです。このことは、単にシルビアシジミとミヤコグサだけの問題にとどまりません。ほかの昆虫類と植生についても、同じことが言えるわけです。



シナダレスズメガヤの除去作業

いずれにせよ、シナダレスズメガヤの除去がきっかけとなり、私たちの会と東京大学の研究室やリバーフロント等との協力関係が始まりました。そして更に、この協力関係は深まりと広がりを見せつつあります。シナダレスズメガヤの取り持つ縁と言えるかも知れません。